

女か虎か2010

かぶらやこうし
鋪谷嘴矢

皆さんは、「女か虎か」という作品をご存じだろうか？

十九世紀にアメリカの作家ストックトンが書いたリドル（なぞなぞ）・ストーリーだ。

かいつまんでお話すると――

あるところに蛮族の王がいた。普段は寛大な王であったが、重大な犯罪が起こった時は、その処罰を自然に委ねるのが常だった。

すなわち、女か虎か――

被告を広場に引き出し、二つある扉のうちの一つを選ばせる。

片方には絶世の美女が、他方には獰猛な虎が。

美女を選べば、男は、たとえ妻帯者であろうとも、王の命令で、その女性と娶せられ、虎を選べば残酷な死を迎えるのだ。

王には美しい娘がいた。彼女は、一人の若者に恋をした。

やがて、その無法な恋は、王の知るところとなり、若者は、究極の二者択一を迫られることとなった。

必死の王女は、その強い意志の力で、かつて誰もなし得なかったことに成功した。

どちらの扉に美女がいるかを知ったのだ。

だが、同時に、王女は、それが王国一の美女と噂される女であることも知ってしまった。

そして、彼女は知っていたのだ。

かつて、かの美女が、彼の恋人に対して熱い眼差しを送っていたことを。

その日から処刑の日まで、王女の眠れぬ夜は続いた。

ある時は、恋人が獰猛な虎の爪にかかつて無惨に死を遂げる夢で目を覚まし、また別な日は、扉が開き、そこに佇む絶世の美女を見て、驚喜する恋人を呪う自分の叫びに飛び起きた。

ついに処刑の日が訪れ、期待をこめて自分を見つめる若者に対し、王女は密かに、片方の扉を指さした。

若者はうなずき、悠然と歩を進め、さつと扉を開け放った……

女か虎か――

なぜこんな話を長々と続けたかというところ、このたび、わたしにも、似たような出来事が起こったからだ。

もちろん、今の世にそんな無茶な王は存在しない。だが——いや、順を追ってお話することにしよう。

わたしが、その女と出会ったのは、一週間前のことだった。

仕事帰りに、動物園の横の通りを歩いていると、街灯の陰になった場所に何かが倒れているのに気づいたのだ。

近づくと、それは黒いコートを身にまとった女だった。

声をかけながら近づいたが、女は身じろぎもしない。

死んでいるのかと不安になった時、ううん、とひと声呟いて女は身を返した。

半身が街灯の光の下に現れる。

「良かった……」

そういつて近づいたわたしは言葉を失った。

ほの暗い街灯の下で露わにされた女の顔が、驚くほど整っていたからだ。

はらりと垂れた髪に顔の半分が隠れているものの、その美しさは尋常ではない。

「しっかりしなさい」

肩に手を掛けて軽く揺ると女は目を開いた。

だが、その目は、まだ薄く膜がかかったようにぼんやりとしている。

どうしたのだ、と問うわたしに、獲物がどうといった、意味不明な返事をする。

「酔っぱらっているのか」

そう考えたわたしは彼女を立たせ、引きずるように歩いて、少し先のベンチに座らせた。

この頃から、どういうわけか、わたしは女に異様な感じを抱くようになっていた。

しばらくすると、ようやく彼女はまともな受け答えができるようになった。

女はジャスミンと名乗った。

タクシーを呼ぼうとわたしはいった。

「いいえ、結構。大丈夫よ」

女は、そういうと、家はすぐ近くだから送って欲しい、と続けた。わたしはうなずいた。

ジャスミンのしなやかな腕をとって、わたしはペイブメントを歩く。真夜中近くのため、すれ違う人影はまばらだったが、そのすべてが、彼女の顔を見、ついでわたしに羨望の眼差しを送ってくる。

それほど、ジャスミンの、一種野性味のある美しさは、印象的なものだったのだ。

歩くにつれて霧が深くなった。

ジャスミンの住まいは動物園から2ブロック先にあった。

中程度のクラスのアパートメントの四階だ。

彼女を部屋に送り届け、請われるままに、連絡先を教えた。

通り出ると、霧のために前が見えにくくなっていった。この街では珍しいことだ。

湿った空気のためか、くしゃみ 嚏が出た。

口に手をやって、わたしは、さっきから彼女に感じていた違和感の正体に気づいた。

彼女に触れていた手、そして彼女の体全体から、毛皮の匂い、いや、もう少し有り体にいえば獣の匂いが漂っていたのだ。

獣といっても、犬などではなかった。どちらかという肉食獣。

そう、彼女は猫に似ていたのだ。

二日後、ジャスミンから電話があった。

お礼を兼ねて会いたいと、彼女はいった。

閉園後の、動物園のチケット売り場の前で待ち合わせて食事をする。その後、彼女をアパートメントに送りがてら、川沿いの道を歩き、水面に映るビルの灯りに照らされながら、当然のように唇を重ねた。血を吸った紅い花のように鮮やかな唇は、暖かく柔らかかった。

「ねえ、わたしのこと」

歌うようにジャスミンがいう。

「好き？」

「どうやらそのようだ」

わたしは、まるで音楽的でない発音で散文的に答える。

「うれしいわ。わたしもあなたが好き」

腕をとり、体を引き寄せて抱きしめようとすると、ジャスミンは、そつと、わたしの胸に手を当てて押しとどめ、

「今日は駄目。あと、二、三日したら、ね」

謎めいた言葉を残し、背を向けて、足早に立ち去っていく。

後ろ姿が小さくなり、やがて見えなくなると、わたしは天を仰いだ。

満月に近い月が、世空に輝いている。

再び、彼女から電話があったのは、さらに三日後の夕方のことだった。

「今夜よ。今夜、わたしの部屋に来て」

電話越しに、ジャスミンは熱く甘くささやく。

「もしあなたに勇気がおありになれば」

「行け」

「必ずね。わたし、ずっと、この時を待っていたのよ。嬉しいわ」

夕方、仕事を終え、ビルの回転扉を出たわたしを、背の高い初老の男が待っていた。

男は、ジャスミンの父だと名乗った。

話があるのだという。

わたしは、彼とともに近くのバアに入った。

彼の話は、にわかには信じられないものだった。

ジャスミンの家系は、もともとイギリス貴族のハンターで、曾祖父バラントレは、大英帝国の名の下、インド北部のベンガル地方、現在のバングラデシュで、数年にわたって虎狩りを続けたそうだ。

ある日、ひととき大きなベンガル虎を追いつめ、とどめをさそうとした時、いきなり虎が言葉を発したのだという。

自分はもともと虎ではない。半人半虎ともいうべき生物で、知性もある。人など襲ったこともない。どうか見逃して欲しい、と。

うなずいたバラントレは銃をおさめ、その場を立ち去ろうとした。すると、虎は背後から、

「馬鹿め、われらのことを知った人間を生かしておくはずがなからう」

そう叫んで襲いかかろうとした。

バラントレが振り向きざま、咄嗟に撃った弾は見事に虎の心臓を貫いたのだった。

虎は断末魔の苦しみの中、最後の力を振り絞ってバラントレに巨大な爪を突き立てようとした。

しかし、すでに虎の命の火は尽きており、爪は彼の胸を軽くかすめ、薄皮一枚を削いだけだった。

しかし、さすがに人外の者の攻撃だけあって、その僅かな傷がもとで、バラントレは月の満ち欠けにともなう、虎に変身するようになってしまったのだった。

呪いがかかったのだ。彼の子々孫々に至るまで。

「では、ジャスミンも、虎になっていると?」

わたしは尋ねた。脳裏に、初めて会った夜の彼女の姿がよみがえる。

「いや、虎になるのは二十歳になってからだ。娘はまだ十九。人間だ」
わたしの脳裏に閃くものがあつた。

「あなたは、どこに住んでおられるのです?」

老人は、ふっと笑顔になった。

「さすが娘が見込んだ男だ。そう、わたしは、その動物園でくらし
ている。虎としてね」

わたしの脳裏に、かつて見たことのある、岩の上で悠然とあたりを
睥睨するシルバーチップの虎の姿がよみがえつた。

「歳とともに虎として暮らす時間が長くなり、いまでは、わずかな時
間しか人として過ごせなくなってしまうのだよ。だから動物園にい
る方が快適なのだ。かわりに、いつでも人間に戻れるようにはなつた
のでね」

「すると、あの夜は——」

「そう、娘はわたしに会いに来ていた。だが、今日、わたしが、わず
かな人としての時間を使って君に会いに来たのは、そんなことをいう
ためではない」

「というと」

「今夜、君は娘に会うつもりだね」

「そうです」

「昨日で娘は二〇歳になった。そして、今夜が最初の満月なのだ」

「すると……」

「そう、たぶん娘は虎になっているだろう。だが、もし、まだ人の姿を保っていて、その間に君に抱かれることができたなら、あの娘は、一生を、人として過ごすことができる。つまり呪いはとける。ベンガルの呪術者から聞き出したことだが、おそらくは事実だろう」

「なぜ、その話をわたしに？ 恐れをなして、逃げるとは思わなかったのですか」

「それはもちろん考えた。だが、君にそれを教えないのは、あまりにアンフェアではないかね。それに、父親として、娘が勇気のない男と一生添い遂げるくらいなら、半虎のまま生きた方が良くとも思うのだ」

「お心遣い、感謝します」

わたしは深々と頭を下げた。

老人と別れ、彼女のアパートメントに向かいながら、わたしは「女か虎か」の話を思い出していた。

あの夜、わたしに出会う前、おそらく彼女は、迫り来る「人間としての自分」への別れに恐れ、おののき、父にすがりついて泣いていたのだろう。

扉の前でわたしの足は止まった。

分厚い樫材の向こうで、何かが、素早く動く音が聞こえる。

——女か虎か

わたしは、異様に伸びてきた犬歯をむき出して笑うと、ドアノブに手を掛け、勢いよく扉を開けた。

へ了へ